

円山川流域委員会の進め方に関する ヒアリング結果のまとめ

1. 委員会の運営に関する意見

この項目につきましては、委員各位に庶務から次のような問いかけをしてご意見を伺っております。

庶務では、各委員のご都合も考慮に入れ、概ね1.5～2ヶ月に1回の頻度で開催するよう心がけて参りました。また、遠方からご出席委員もおられますことから、会議は原則として、午後に開催し、大体2時間半を目安としてきております。

そのような制限を受けた中で、これまで委員会を進めてきておりますが、進行の不手際もあり、「予定時間を超過する。」、「議論が集中して行えない。」などの意見があるのも事実であります。

ここでは、これまでの委員会の運営に関して委員各位の率直なご意見をいただき、今後の委員会を円滑な進行に活かして参りたいと考えております。

参考 例えば、
会議時間を延長する。(4時間程度)
開催頻度を増やす。(月1回程度)
審議項目を絞る。 など

(委員の意見)

会議時間・開催頻度は現状で良い。

会議時間は良いが、開催頻度を月1回程度にする。

頻度は良いが、予定時間にきっちりと終わって欲しい。

会議時間は毎回少し足りない。

会議時間、開催時間は、内容等必要に応じてもっと長く、多くても良い。

審議項目はもっと絞ったほうが良い。

2. 委員会の進め方（あり方）に関する意見

この項目につきましては、委員各位に庶務から次のような問いかけをしてご意見を伺っております。

従来の委員会では、委員会設置者から提示された課題やテーマについて議論を進めていく場合が多いのですが、流域委員会では委員自身が川のあり方や望ましい姿を考え、課題やテーマを設定して議論を進めていくことが設置者から求められているため、委員会開催の当初から、「この委員会では何をするのか?」、また、「どのような作業をすればよいのか?」などの意見が多くありました。

第1回委員会にて、設置者からは、概ね委員の任期の2年を目途に委員会を進めて頂ければとの要望が述べられ、その後、「初年度は情報の共有化を重点的に進める」との合意がなされたことを受けて、現地視察や現状説明による円山川の現状理解に向けた努力を続けてきております。今後の委員会でもこの努力を継続し、委員全員で円山川の現状を理解した後に、あるべき姿に関する議論、また、そのとりまとめの議論へと進んでいく予定となっております。

この委員会の進め方やあり方に関してご意見をお伺いします。また、関連してわかりにくい点や疑問点等ございましたら、それらもお伺いします。

(委員の意見)

現在、委員長が示されている円山川の現状を理解した後に、あるべき姿に関する議論、そのとりまとめの議論と進めていく方針が良い。

課題や案を出して、叩き台として審議することが重要である。

個別の事象について説明いただきたい。どのような課題があり、どのような改修を行っていくのかなど。

原案の叩き台があれば、意見が言いやすい。但し、現状説明を通して、委員側から課題を抽出していこうとする現在の進め方でも論点はいくつか出てきている。

原案を提示し、それを納得いくまで揉んでどうか。

現時点での河川管理者からの提言の叩き台は、必要ないと思う。

もっと議論できる題材を出して、活発な意見を出し合いたい。

円山川独自の方法をとるのならば、それなりのやり方が必要であり、他の流域のやり方を示して、参考とすればよい。

現状では、何時、何がどういう過程を経て決まるのか、全体のフローが認識されていない。

円山川全流域のことを念頭において審議すべきで、上流域のことは農水省や兵庫県の参加も要請して進める必要がある。

円山川に対して誇りに思っており、さらに自然環境の質を高めるための議論をしたい。

行政の行ってきたことのどこに問題点があり、どのような反省点があるのか、示していただきたい。

目的がはっきりとせず、もやがかかっているように感じる。

共通のベース認識形成には、時間が必要。

3. 勉強会や分科会を含めた情報の共有化についての意見

(勉強会や分科会の開催等に関する意見)

勉強会、分科会の開催は賛成である。

勉強会、分科会は、会議内容の密度を上げ、理解を深めるのに必要。

形式は勉強会、分科会のどちらでも良い。頻度は多いほうが良いと思う。意見を言いやすくするための方法として、小グループ化するなど、討論形式を工夫して欲しい。

通常の委員会では、委員の人数とバランス、時間の関係もあり、発言・質問がしにくい。勉強会や座談会などの形式の会を求めたい。

交流会のような会は実施できるのであれば、行ってほしい。お互いに気心を知ることは重要と考えている。

現段階では勉強会は必要ないのではないか。具体的な個々のケースが提示されれば、それに関する勉強会が必要である。

(勉強会の進め方に関する意見)

要綱等に縛られた組織にはせずに、任意にグループをつくってできる勉強会のような形にしたい。

ある程度公開し、概要をとりまとめるのが良い。

勉強会の成果を委員会で公表するような、公開形式が良いと思う。

議題によっては、非公開のほうが良い場合もある。

少しフリーに話ができる場が欲しい。

ワーキンググループ方式が良く、資料を少なく議論する場が欲しい。

知識を深めるには、できるだけ気安く発言できる形式の勉強会が良い。

勉強会の頻度は、そんなに高くなくても良いと思う(年1~2回)。

専門用語がわかりにくいところがあるので、そのような内容の勉強会も考えられると思う。

何ヶ月かに1回程度の頻度で、非公開で実施して欲しい。

勉強会の謝金は、旅費程度で良いのではないか。

(分科会の進め方に関する意見)

より深く考え、審議する必要がある場合は、委員会ではなく、分科会で取り上げることとなる。但し、テーマが問題となる。

原案の目次を作成し、目次のグループ毎に分科会を分ける方法もある。

分科会の場合は、当然、委員会と同じく、公開は必要である。
分科会は必要と考えられた場合は設ければ良いが、きちんと機能していくことが重要で、委員会全体の方向とずれないようにしていくのは、現状では難しいと思う。
円山川流域委員会程度の人数であれば、分科会は必要ないのではないか。

4. 情報の共有化の最終形態について

この項目につきましては、委員各位に庶務から次のような問いかけをしてご意見を伺っております。

第5回委員会で示された円山川流域委員会の進め方（委員長案）では、情報の共有化の最終段階において、次の議論を進める基盤とするために、円山川の望ましい姿、円山川のあるべき姿などについての議論を行うとされています。この考え方について議論が行われ、提言としてまとめられれば良いが、それを前提にすると委員の負担が大きくなる可能性もあり、議論の整理の段階まででも良いと考えているとの見解が委員長より示されましたが、この考え方について、ご意見をお聞かせください。

（委員の意見）

円山川のあるべき姿、望ましい円山川の姿に関して議論を行い、提言としてまとめられれば良いが、それを前提にすると委員の負担が大きくなる可能性もあり、議論の整理の段階でも良いと考えている委員長の考えに賛同する。

課題に対する要望が強い時、提言まで発展すると思われる。必然性に任せたいと思う。

提言は、委員会を進める中で、必要と考えられれば行えば良い。

委員が興味を示す重要課題は、自然に提言までの議論に発展すると思う。整備計画は実効性のあるものが必要で、但馬でしかできないものをきっちり詠い、提言まで作成したい。

整備計画を維持できるシステムの提案が必要なのではないか。

委員の意見が整備計画にどう反映されるのか。

5. 一般住民から委員会への意見聴取に関する意見

この項目につきましては、委員各位に庶務から次のような問いかけをしてご意見を伺っております。

現在、一般住民から流域委員会への意見については、例えば、ホームページに書き込み欄を設けるといったような、積極的な聴取手段はとってはおりません。この点について、委員各位のご意見をお伺いします。

(委員の意見)

メール、アンケート等の会議以外の文章による聴取方法を利用すれば、意見を言いやすいと思う。

委員会（または、ワークショップなど）が地域に出て行き、住民の意見を聞く。住民との対話集会。

流域の各市町の河川に詳しい人を抽出し、話を聞く機会をつくる。

アンケート等の質問内容は、注意が必要であり、分科会等で設定する必要があるかもしれない。

ある程度の成果がまとまったところで、シンポジウム等を開催する。

流域の小学生、中学生を対象として、円山川についての作文、絵などを募集する。川に対する関心を高めることにもなるし、住民がどのように円山川を捉えているのかがわかり、整備の方法の一例が示されるかもしれない。

6. 委員が説明を受けたい内容

治水全般、ひのそ島の改修（治水に関して）
計画高水流量の算定方法、治水経済比較の考え方。
50～60年以前の水害の状況と地域の人への対応状況
平常時の人と川の接し方
地域社会と円山川の関わりの変遷
まちづくりと文化の観点
人、河川、農業との各々関わりや自然再生法との関係
円山川や文化的景観などを保全してゆくにはどうすればよいか。
地元の人はどこでどんな魚を捕ってきたか
実体験から「川と人間との関わり」
60～70代の人たちが昔どのように川で遊んでいたか
ひのそ島の景観について
コウノトリや自然への取り組み
砂防ダム建設箇所数の増大と下流地域の安全度の関係。
山林の変化を他の委員はどのように感じているか。
一般的な森林の保水力。
河川行政の主体が治水から（治水＋環境）に変化してきた過程